

翠兄年譜

宝暦四年(一七五四) 一歳

○常陸龍ヶ崎上町に生まれる。本名杉野以貞、通称治兵衛。杉野家は伊勢屋の屋号で油商を営む豪商だった。

天明元年(一七八一) 二十八歳

○四月二十五日 江戸の**蓼太**と**魚文**が翠兄宅(杉野氏の許)に宿泊。二十七日には**蓼太**、**魚文**、翠兄の三客が龍ヶ崎の**太如**亭に行き、二十八、二十九日は銀雨亭(太如の別邸か)で探題句会を催す。

○五月一日 龍ヶ崎の**太如**とともに**蓼太**、**魚文**を連れて筑波山に向かう。途中源三位頼政墓、奈戸岡三本松、女化原を通過して土浦の城下に宿泊する。
○五月二日 師付の田井(かすみがうら市志筑)を通過して筑波山下の稲見伝兵衛宅に宿る。

○五月三日 先達の男を雇って筑波山に登る。下山後稲見亭から龍ヶ崎の銀雨亭に戻り、**蓼太**、翠兄、**魚文**、**太如**四吟歌仙の続きを付ける(『筑波紀行』**蓼太**、翠兄編)。

天明二年(一七八二) 二十九歳

○十月十三日(嵐雪の忌日)、筑波山一の鳥居付近に嵐雪句碑「雪ハマうさずまずむらさきのつくば山」を建立する(宮立るものは杉野氏翠兄、是をしるすものは雪中庵**蓼太**、「常陽龍箇崎杉野翠兄建」)。

天明五年(一七八五) 三十二歳

○三月 **蓼太**、**雪万**を迎え、道仙田から小貝川に舟を浮かべ、砂波(すなつば)に上がって桃の花見をする(『桃一見』筑波庵翠兄序)。この頃筑波庵が完成した。

天明七年(一七八七) 三十四歳

○九月七日 師**蓼太**が江戸で没する。深川で没した**蓼太**のもとへ翠兄はすぐに赴いた(『**蓼太**追善集』ふじごろも』天明七年 完来編「**蓼太**居士終焉記」)。

寛政元年(一七八九) 三十六歳

○この頃の冬、**巒蓼松**が翠兄の筑波庵を訪れる(『ひたち紀行』**蓼松**著『えどわうらい』丁知編)

寛政三年(一七九一) 三十八歳

○春、夏 豊前の龍歩、翠兄、一茶(二十九歳)三吟歌仙一卷と、翠兄、一茶両吟歌仙三巻を巻く(『連句稿』一茶著)。

寛政十二年(一八〇〇) 四十七歳

○春 宗匠(俳諧指導者)として立机し、家業(油商)はこの頃には隠居していた。翠兄編春興帖『三節集』には、「珥比磨利隠士筑波庵主玄峯翠兄」と名乗っている。同書は常陸南部、下総、上毛藤岡連等の人々の作品を収録している。

享和元年(一八〇一) 四十八歳

○一〇月 『筑波庵評月次三題句合』を発行。催主は桂文。毎月三題を出題し、高点書抜き丁摺半紙各二丁を発行。各作者の三句の合計点の順に天人各一組を巻頭に、「五点之部」「丸五点之部」、最後に「巻中秀逸異玖」と筑波庵(翠兄)の当季吟で締めくくる。六月発行の月並に取手の沢吐嵐(近嶺)が入集する。

○七月六日 若芝町の風篋庵乱竿没。乱竿句碑の碑陰に翠兄が銘文を刻む(星宮神社乱竿句碑)

享和二年(一八〇二) 四十九歳

○翠兄編『むらさきくさ』に、布川の古田月船の二句が入集する。

文化二年(一八〇五) 五十二歳

○十一月十八日 この頃から翠兄は雪中庵派を離れ、成美、道彦、巢兆ら、江戸著名俳人との親交を深める(双樹宛書簡)。

文化三年(一八〇六) 五十三歳

○正月 野田長命寺の大師堂に俳額を奉納する。主催は**帯雨**、撰者は翠兄。

○二月二十二日 翠兄の母没。法名は観寿軒安窓妙喜比丘尼。

○四月十三日、**一茶**が布川に寄った際、「翠兄母悼今からは桜一人よ窓の前」の追悼句を詠む(文化句帖)。訃報は**月船**から聞いたか。**月船**は「伊勢屋」と号する廻船問屋、宿屋を営んだようで、杉野家との縁が深かったか。

○四月 『筑波庵評四季乱題』発行。

文化七年(一八一〇) 五十七歳

○この頃『異玖集』(文化七年頃 能阿編)が刊行される。筑波庵の庵裡として五年(文化三年〜七年)以上雇われた**能阿**の編で、翠兄から「異玖」の高点を得た句を収録。

文化十年(一八一三) 六十歳

○春 道彦、成美と隅田川で百韻連句を催していた際、自ら剃刀して道隣と改号する(墓碑)。

○九月七日 師**蓼太**の二十七回忌に**蓼太**句碑「たましひのいれものひとツ種ふくべ 雪中庵**蓼太**」を建立する(医王院)。

○十月二十七日 病没。

文化十二年(一八一五)

○十月二十六日 **一茶**が布川に入り**近嶺**と会う。**近嶺**は翌二十七日に帰る(『七番日記』)。この日は翠兄の三回忌にあたるので、**月船**、**一茶**、**近嶺**の三人で翠兄追善句会を催したか(『関東俳壇史叢稿』)。

俳諧の師

○大島蓼太（一七一八～一七八七）

雪中庵二世桜井吏登に入門。門人三千人ともいわれる一大勢力を築く。俳風は芭蕉晩年の炭俵調（かるみ）を基調とする。

（雪中庵派（雪門））

嵐雪（吏登（二世）・蓼太（三世）・完来（四世）

（玄峰）

翠兄は初号梅雲、別号筑波庵、玄峰、薙髮号道隣。

【資料1】『俳家奇人談』文化十三年 竹内玄玄一著

その妻唐猫を愛する事法に過ぎたり。雪（嵐雪）諫めて、「それ獸を愛するにも程あるべし。人間に増りたる敷物、器物、いむべき日（物忌みの日）にも生着を食するなど宜しからず。」といへど、忍びてもこれを改めざりけり。ある日妻の他行を幸ひ、ひそかに猫を遠方へ遣はしける。日暮に帰り来りて問ふ、雪その行方を知らずと答ふ。妻泣き叫びて恋慕ふこと切なり。

猫の妻いかなる君の奪ひ行く（烈女）

とかこち（嘆き）つつ心地悪しくはなりぬ。隣女ひそかにその詐（いつわ）りを告げて、猫の行先を語る。妻大いに恨みて夫婦しばしばいどみ争ふ。門人打寄り詫びさせて雪の心を和げたりとかや。「睦月はじめの夫婦いさかひを人々に笑はれて」と端書して、

悦ぶを見よや初音の玉はつき（嵐雪）

とはこのときの事にぞありける。

※「玉はつき」は玉の飾りをつけた簪。正月初子の日に蚕室に蚕室を掃くのに用いた。括弧は私注。

【資料2】『蓼太句集』三編 寛政五年刊

筑波庵

帆か驚か坂東太郎かすむ日は（蓼太）

翠兄亭（上町）

糞桶の古き契りやもゝ柳（蓼太）

道仙田一見 龍ヶ崎の桃見也（天明五年）。

呼接遠里いくつ桃明り（蓼太）

筑波庵

露霜をかねてぞ庵は筑波葺（蓼太）

知人・友人

○巒蓼松（一七六〇～一八三二）

江戸の人。別号八朶園、米隣翁、氷黒井、氷黒庵、太年廬、鉢華居士。大島蓼太門。近世後期の江戸俳壇における重鎮で、吉原大文字屋の妓ひととを身請けして妻とした。

【資料3】『えどわつらい』文政七年 丁知編

取手の渉しあなたにはしる人両三家あるをどぶらふべきに、亦かきくらす雲の今も降べく見ゆれば心いそがれて、午の貝（正午を知らせる法螺貝）過ぎるに、はやくも龍がさきにつきぬ。近き年造り建ける筑波庵、さこそあたらしく磷（きら）やかにして月も時雨も漏こぬや。うらみなるべきなかねて思ひをりしが、あるじは中／＼富をおもてにせざるの操あれば、庭の木どもより垣根折戸の姿までもほどよく寂あり。見るからにひと際の心まさりせられて、

聞しより此冬がれや筑波ぶき（蓼松）

落葉の中におもひ入る友 翠兄

「さはらざりけり」といふ哥の言葉（筑波山は山繁山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり 源重之『新古今集』恋一1013）をとりたる腋（わき）にていと興あり。かくて十日あまりも遊びをるに、ある夜雑談のはしに廻文の句の事いかにといふ若うどあり。さればとて題を霜と出ししが、夜既に三更ならむとにたれも／＼吟なくてやみぬ。あくれば長竿村のかたへかへる人の有ときくに、よき道づれなればいとまを乞ふ。且々は若芝へおもむくとて是も行李をとりつくるふに、餘波をつけて来合せたりし連衆馬ひかせむなどいふをいなみとどめるうちも、さきの回文いはいやみしが心のこりなれば、漫興にまうし出せる廻文の句、

蕙踏（ふま）む野もしる霜の馬（むま）ふたつ

※『えどわうらい』は、押砂（稲敷）出身の高梨丁知による父常俊の追善集だが、常俊が生前書写した蓼松の常総紀行文を掲載している。同書の序文には、「寛政のはじめ八朶殿（蓼松）の常総に遊歴ありしとき、やたて書なるものとおもはる。」（文政七年冬松斎丁知序）とあり、蓼松は寛政元年頃に筑波庵に来たようである。紀行文の内容は『ひたち紀行』（寛政初年頃 蓼松著 東大酒竹文庫）と同一である。

※『八朶園句集』白梅社中編 天保二年刊

廻文ふたつ。

翠兄亭に日を経ぬるが、けふは暇告て、且々は若芝へといひ、己は長竿のかたへとて共にたち出るに、そこに在ける人の望めるにまかせて書出せる即事、是は昨夜の余興也。

蕙踏ん野もしる霜の馬ふたつ（蓼松）

おなじ頃、那の田龍窟にしばらく在けるが、

佐原の何がしに迎へられて行けるが、また廻

文の句せよとせめられて、

梅十日後見る道の香をとめむ（蓼松）

○小林一茶（一七六三〜一八二七）

豊前の龍歩、翠兄、一茶の三吟歌仙、翠兄と一茶の両吟歌仙三巻が巻かれたのは寛政三年（一七九一）と考えられている。享和二年（一八〇二）三月二日、一茶は翠兄に手紙を出す（『急遞記』）。文化三年（一八〇六）四月十三日、一茶が翠兄の母の追悼句を詠む（『文化句帖』）。文化十年（一八一三）三月一日、柏原に帰郷した一茶に翠兄（道隣）からの手紙が届く（『志多良』）。一茶が親しかった布川の古田船と取手の沢近嶺は、どちらも翠兄の門下生である。

【資料4】『連句稿』一茶 寛政三年（推定）

時鳥待や夕べの夜一寸 豊前雲水 龍歩
ぼたんもちりぬ雨の此ごろ 常陸竜ヶ崎 翠兄
都人さすが金（の）鯉買ふて 一茶

（以下略）

ぬ（寝）る蝶の白きは物に安げ也 翠兄
日永に見ゆる芝の捨鋏 一茶

（以下略）

其二

雛鳥（の）花びらあさる春日哉 翠兄
こゝも長閑き垣の枳殻 一茶

（以下略）

其三

見えさうにして見へぬ也時鳥 翠兄
煙るが如く兒に入梅雨 一茶

（以下略）

○秋元双樹（一七五七〜一八一二）

下総流山（千葉県流山市）の人。本名は秋元三左衛門。家は味噌、酒、醤油、味噌の醸造元。俳諧は今泉恒丸門。一茶の庇護者として知られ、享和三年（一八〇三）以降、一茶は流山に百三十六泊ほどしたが、そのほとんどが双樹宅であった。双樹は文化元年（一八〇四）十月、一茶の引越祝いに家財道具を贈り、江戸の一茶宅に宿泊したこともある。巢兆、翠兄らと親しかった。

【資料5】双樹宛翠兄書簡①

文化二年十一月十八日（推定）

如来命発寒之節愈御清栄可被成御凌奉寿候。私義無異罷在候。乍憚御安慮可被下候。然ば巢兆叟貴家迄被参候由草庵御尋可被下候よし。然処貴子御差合御残多御坐候。秋中高梨氏被参候節も御待申候。其折も差支致、扱々御残多御噂のミ申暮候。巢兆ぬし扇面被贈下奉存候。御面別而見事之と御坐候。且帯兩方へ御紙面被下候處、此節野田へ被参候。大方今（日）明日之内可帰候間、帰次第御状可遣候。奉納貴句相催候由御噂御坐候。得貴句感吟不少候。中にも荃菜に落葉かけ合甘心仕

候。御風聴恐入候事二御坐候。扱野生も近比は無事繁多之上俳諧殊之外流行いたし草庵へも隨身五六輩ツゝ不絶有之（能阿、竹里、文義、蜂子、月兔、桂文）点取おもらし参候而昼夜無寸暇中々心心の俳諧たのしみ候事も相成かね候。いづれ工夫致しちと閑を得候様二心がけ居候迎茂、遂隠者之内と寛く御風交も相成間敷候。御庵より乍憚巢兆宗へも其段宜御伝声可被下候。雪門之方は相断退坐致し候へども、いまだ此辺日く客差つどひ心のどかならず候。ちと俳諧の閑を得候やうに心がけ居候。摺もの一葉御目二かけ候。角力番附是又入貴覧候。右摺ものハ不残二いたし冬角力御加入可被成候。筆帛申尽しがたく早々及貴答候。頓首。

霜月十八日 翠兄

双樹様 几右

秋冬

三保浦富士讚

新酒船うまみのつくハこゝらかな

行秋や朝はしりする里の犬

山伏が足駄の（以下欠損）



千住の建部巢兆が流山の双樹宅に訪れ、双樹から巢兆の扇面が翠兄に贈られている。帯雨は野田の旧家高梨家二十四代兵左衛門と考えられてきたが、『筑波庵評四季乱題』（文化三年四月 翠兄編）に「勢州津」、「異玖集」（文化七年頃 翠兄編）に「伊勢」の人として入集する。本書簡によれば、高梨氏と帯雨は別人で、当時龍ヶ崎にいた帯雨が太子堂に俳額を奉納（資料6）するために野田に一時滞在したようである。翠兄は俳諧点者としての繁忙を嘆き、巢兆、双樹を「心の俳諧」を共有できる仲間と考えていた。文化三年（一八〇五）以降、翠兄と雪門との交渉がなくなったことがわかる。〔資料6〕野田太子堂奉納俳額との関連から、本書簡は文化二年十一月十八日の執筆と推定される。

【資料6】太子堂奉納俳額 文化三年 翠兄撰

奉納 雀主 帯雨
鶯のものにしてある小家かな 流山 双樹
冬の梅よしなき風のけふも吹 糠田 周晴
ふゆの梅つれなき人の障子はる 青梅 貞宇
雨二日過て秋知る月夜かな 水海道 公木
わか葉山あめともならず雲の居る 全 鬼雀
よい程の雨のあしたの若葉かな 全 文酔

夏の月しばらく風の見ゆる哉 桐作 作好
いたずらに咲てをりけり冬(の)梅 取手 露水
ひとつちりひとつ咲けりふゆの梅 全 咄嵐

(中略)

おちついて黄鳥啼や里の奥 当所 帯雨
雨たもツ露にしばしの月夜かな 庵裡 文義
鳩の行のかけや月もる峯の松 全 竹里
後(の)月おもへバ秋も三かいち 補助 能阿

応久

うぐひすやふたツになつてたえず啼 筑波庵翠兄

文化の三とせといふ歳の正月

※野田市上花輪の長命寺太子堂に現存する。催主は帯雨。太子堂の再建(文化二年)を記念して奉納した俳額。翠兄撰。庵裡は文義と竹里 補助は能阿。高さ66センチ、幅177センチ板の天地に金砂がちりばめられ、縁木の四隅に大きな飾り金具を備え、一般の俳額よりも豪華である。野田市文化財。(「杉野翠兄の撰句額」矢羽勝幸「二松俳句」刷新十二号)

俳額は貴重な文化財 所在不明の俳額

① 天王奉納額面 文化四年六月 翠兄撰

催主は能阿。補助は起風、月兔、蜂子。龍ヶ崎の起雲、木端、玄露、再可、玉泉、蘇雲、可久、五石、五百丈(女)、作好、起風、巴山、月兔、蜂子が入集。「月うれし一日蟬になかれたり 筑波庵翠兄」。

② 筑波郡久賀村(つくばみらい市)の観音寺本

堂の掲額に京の丈左、大坂の升六、尾張の士朗、

甲斐の可都里、白石の乙二、江戸の巢兆、成美、

道彦らが一句ずつ連ねて奉納。「つくぐくと昏

の鐘きく野菊かな 翠兄」風雨に色あせた墨

色で文化之五歳之年之七月十日に奉納。

(『杉野翠兄』長南俊雄著P78に記述あり)

【資料7】双樹宛翠兄書簡②(六月十四日)

如來書愈御鹿狩已後は打絶御無章申上候。愈御清栄罷來御暮奉寿候。野生無異罷在候。乍憚御休意可被下候。然ば宇野氏御地へ被參何角御厚情御世話被下候由何分可然御心添可被下候。且御風流被遊被成候由も兼々及承御同意御床敷存過候。將又御句ども逸々感心不少奉存候。扱又三輪山の白石御慮被下忝奉存候。遠來之奇石別而珍敷風聴仕候。いつか見合御尋可申上候。二郷半、鹿見塚などにも社中出来候まゝ近年之内御尋可申上候。御連中様御取立置可被成候。

一、子供之儀被仰下猶又宇野氏よりも承知仕候。句自前二而も此間は追々子供參申上いづれ手配人ほども可申談より隣家も此間三人勢弱より罷下り候。今少し早く御坐候へば宜御坐候。いづれ取合七見可申此節は急なる御心二為懸早々及貴答候。頓首。

六月十四日

翠兄

双樹様 几礼

明る夜の障子はむ也夏の虫

各文房の具を題にわかちて硯屏にあッ

虫干の雛に仮の几帳かな

柵堂連より鱸魚を飛せこせし返りごとはしに

よし土用取るハ左慈かうつハもの

右申ちらし候。御一笑可被下候。以上。



※二郷半、現埼玉県三郷市、吉川市

鹿見塚、現埼玉県吉川市

二郷半(埼玉県三郷市)鹿見塚(現埼玉県吉川市)などにも社中を拡大したことを双樹に報告して、今後取り立てるように依頼している。

門人

○古田月船(？) 一八三七)

下総布川(北相馬郡利根町布川)の人。古田和右衛門。別号五水庵。伊勢出身で廻船問屋を営んだといわれ、宿屋を兼ねたか。一茶を厚遇し、記録によれば一茶は289泊し、常総随一の常宿にしていた。文化三年、一茶は翠兄の母の死を布川で知る。

○沢近嶺(一七八八〜一八三八)

下総取手の国学者。通称与兵衛。月の舎、梧桐庵と号す。はじめ翠兄に俳諧を学び、のち、村田春海に和歌を学ぶ。国学では高田与清、清水浜臣とともに三傑と称された。

【資料8】『春夢獨談』近嶺著

近嶺は天明八年五月十七日に生まれ侍りて、わらはに侍りしほどの事はきこえまつるすさびも侍らず。享和元年十四歳になりける年、俳諧の狂句をうそぶぎいで侍りて、そをよるづよりをかしくおぼえ侍りて、龍ヶ崎の里なる杉野翠兄大人にとひまなぶほどに、この大人また皇国のいにしへ学(国学)をこのまれば、手にをは假字づかひなどは、この大人のさとしによりて、その心を得はべりき。(中略)

そのかみおのれは吐嵐といひし頃の俳諧狂句の集二巻ありけるが、ことしやきうしなひぬ。こはうせてめでたきなり。おのが若き頃と今とはうつりかはれる事年々歳々の流行なれば、今おもへばいたくおくれたりといふべし。されどいさゝかこゝにかいつく。こは翠兄翁ならびに尾張の士朗、信濃の一茶、江戸の成美などに見せて其時よしとうべなはれしのみなり。

ともし火に露おく春の月夜かな (近嶺)

○田中蝶道(一七七八〜一八五七)龍ヶ崎の人。道察良忠居士。安政四年没、八十歳。

○藍澤梅塙 佐沼村の人。二世筑波庵は自称か。大統寺梅塙居士寿碑「大宰府の神影を爰にうつし奉りて 植かえた梅もおとらず咲にけり 龍嶺梅塙」。

○郡司翠雪 筑波庵二世を継承。筑波庵は二十五世(昭和十八年)まで継承。

翠兄の編著

◎『筑波紀行』天明元年 蓼太、翠兄編

天明元年四月二十五日から五月三日まで、江戸の蓼太、魚文を迎えた折の記念集。二人は翠兄宅に宿泊後、太如亭に行き、銀雨亭(太如の別邸か)で探題句会を催す。五月一日、龍ヶ崎の太如とともに蓼太、魚文を案内し筑波山に向かう。途中源三位頼政墓、奈戸岡三本松、女化原を通過して土浦の城下に宿泊する。五月二日、師付の田井(かすみ)がうら市志筑)を通過して筑波山下の稲見伝兵衛宅に宿る。五月三日、先達の男を雇って筑波山に登り、下山後稲見亭から龍ヶ崎の銀雨亭に戻り、蓼太、翠兄、魚文、太如四吟歌仙を完成させる。

◎『桃一見』天明五年 翠兄編

天明五年三月、蓼太、雪方を迎え、道仙田から小貝川に舟を浮かべ、砂波(すなつば)に上がつて桃の花見をした時の記念集。(『関東俳諧叢書』第二十七巻所収)

◎『三節』寛政十二年 翠兄編

龍ヶ崎三十一名、長沼(つくばみらい市)三名、河原代(龍ヶ崎)三名、取手一陽窟連七名、布川連四名(こ)崎(香取郡神崎町)連七名、筑波根連小田七名など、計一七一名の三節(歳旦・春興・歳暮)吟を半紙本四十一丁に収める。布川の不浅は宗旦恵(『利根川図志』の著者赤松宗旦の父)。

◎『筑波庵翠兄歳旦帳』寛政十三年 翠兄編

巻頭は「注連縄やむすべる文字も仮名の國 うぐひすや啼ハ鳴たが其後は 久かたの何姫ならんきぬ配 珥比磨利隠士筑波庵主玄峯翠兄」の三節、巻末は雪中庵完来の句で締め括る。常陸連、下総連等百三十三名の三節(歳旦・春興・歳暮)吟、巻末の「混雑」(五十名)には近江の芳志、水戸の青郊、下総の其日庵野逸、浪花八十二翁大江丸といった宗匠格の著名人の作品がみられる。合計百八十七名の作品を収録。巻末に「天地開關筑波山下俳諧連歌蕉風道場」の印がある。これは一寸八分角の南蛮鉄製で、筑波庵二十五世根本天外氏が所蔵していた。

◎『筑波庵評月次三題句合』享和元年一〜十月、春季月次一点

翠兄編。催主桂文。毎月三題を出題し、寄せられた句に点を掛け、その高点書抜き丁摺半紙各二丁を発行する。各作者の三句の合計点の順に天地人各一組を巻頭に、以下は「五点之部」「丸五点之部」、最後に「巻中秀逸異玖」と筑波庵(翠兄)の当季吟で締めくくる。正月百一輩、二月八十六輩、三月百十一輩、四月八十三輩、五月八十六輩、六月九十二輩、七月五十六輩、八月八十二輩、九月八十六輩、十月九十六輩、春季八十二輩。(長南俊雄蔵)

◎『むらさきくさ』享和二年 翠兄編

翠兄の三節(歳旦・春興・歳暮)吟を筆頭に常陸社中(布川の月船ら)、下総社中のほか、近江の芳志改芳之、仙台の雄淵、浪花八十三翁大江丸、其日庵野逸、白兔園宗瑞といった著名な宗匠格の作品を収録し、雪中庵完来の句で締めくくる。巻末に「天地開關筑波山下俳諧連歌蕉風道場」印。

◎『筑波庵評春乱題』文化三年正月 翠兄編

催主桂文。補助月兔、蜂子、文義、竹里、能阿。天東鶴三十六点、地鬼雀 位三十一一点、人木鶏三十一一点。惣連百六十六輩句員千六百六十章。巻末に「天地開關筑波山下俳諧連歌蕉風道場」印。

◎『四季乱題』文化三年四月 翠兄編

庵裡文義、竹里、能阿、債主柳葉、補助筑波根連、天眠石十六点、地以介十六点、人和暢十五

点、惣連百四輩。(早稲田大学図書館蔵)

翠兄の秀句

翠兄が理想とする句風は、高点句集『異玖集』(文化七年頃 能阿編)に反映している。同書作品傾向を加藤定彦氏は、「日常生活における偶感や季節の移ろいとともに自然景に美的情趣を捉えようとす
るやや繊巧ともいえる作風」と評している(『関東俳壇史叢稿』)。翠兄自身の秀句にも自然詠が多く、宗匠としての技量が十分に備わっていたことが、遺された秀句作品によって観取できる。

(春)

花咲て山田に水の通ひけり

『新類題発句集』寛政五年 蝶夢編

はるの草軽き草履の売れにけり

『歳旦歳暮』寛政十二年 翠兄編

古雛に胡粉の過し余寒かな

『ひさごものがたり』文化十年 太筈編

(夏)

さみだれや草臥て地を飛ぶ螢

『筑波紀行』天明元年 蓼太、翠兄編

力なき夢や見るらん顔に蠅

『発句類題』文化四年 蓼松編

(秋)

跡じさりじさりすすきに入日かな

『新題林発句集』享和元年 史公編

宿直守うら枯声や右の月

『むさしの三歌仙付録』天明三年 甘谷ら編

(冬)

冬の日のとり落しては海くれぬ

『俳諧何袋』文化九年 一峨編

引て行馬に湯気立ちみぞれ哉

『新類題発句集』寛政五年 蝶夢編

【主要参考文献】

『俳人筑波庵杉野翠兄』小林文夫 一九五〇 雑草社

『杉野翠兄・竜ヶ崎の俳諧師』長南俊雄 一九七九

ふるさと文庫

『茨城の文学碑・名碑百選』堀米喜八郎 一九八九 筑波書林

『一茶大事典』矢羽勝幸 一九九三 大修館書店

『常総の俳諧と杉野翠兄・蓼太、翠兄、一茶との交遊』鈴木久

二〇一一 馴染歴史講座平成24年度第二回レジメ

『関東俳壇史叢稿』加藤定彦 二〇一三 若草書房

『筑波の道・連歌俳諧史探訪』二村博 二〇一六 常磐書院

『秋元双樹宛新出書簡集』二村博 二〇一八

『連歌俳諧研究』第百三十三号

◎『秋三題句合』文化三年秋 成美・道彦 翠兄評

筑波庵評は天・蝶舞(神生)、地・公木(水海道)、人・連銭(河原代)、随斎評は天・壺仙(小田)、地・以介(関本)、人・籟保(若柴)、金令舎評は天・茂陵(二ノ)、地・蝶舞、人・眠石である。翠兄は「五点之部、丸五点之部、異玖之部」、成美は「五点之部、十点之部、秀逸十五点之部」、道彦は「五点之部、七印之部(二段階のみ)」と評し方が異なる。催主は祭魚、連銭、補助は能阿。出句者の大半が常陸の俳人であるから、翠兄が成美と道彦に撰者協力を依頼したのである。『其日庵』所収)

◎『天王奉納額面』文化四年六月 翠兄撰

竜ヶ崎、北浦の俳人を中心に俳額を奉納する際に集めた句を評点した摺物。天・壺仙二十五点、地・丸二十五点、人・観魚二十四点。催主は能阿、補助は起風、月兔、蜂子。「月うれし一日蟬になかれたり筑波庵翠兄」。

◎『筑波庵評四季乱題二万句合』文化四年八月 翠兄編

惣連二百輩から四季の句五十句ずつを集めた一万句を、評点した摺物。江戸、成田(素迪)、水海道、館林、取手(近嶺)等から投句があり、「五点之部、丸五点之部、異玖之部」に分けて収録。天・素迪百二十四点、地・月兔百二十三点、人・白河百十四点。催主柳葉。(『其日庵』所収)

◎『両判筆之綾』文化四年八月 成美・翠兄評

成美判七点之部は素迪、寥窓(湖中)ら八十二句、十五点之部二十二句、惣連二八二〇章、天・為一、地・子鴻、人・東翠、催主玉山(大中)、牛子(大中)、為一(常陸太田)。翠兄判五点之部は、寥窓(湖中)、能阿(龍ヶ崎)、柳葉(龍ヶ崎)、吐嵐(近嶺)ら百三十三句、惣連二八二〇章、天・牛子、地・連銭(河原代)、人・疇事(安塚)、催主玉山(大中)、牛子(大中)、為一(常陸太田)。常陸、岩城、下野の俳人が投句。(『続洞海舎涼谷俳諧資料集成』中根誠 所収 増田家蔵本)

◎『異玖集』文化七年頃 能阿編

筑波庵の庵裡として五年以上雇われた能阿の編。下巻のみが伝わり、上巻は未発見。翠兄から「異玖」の高点を得た句を収録。巻末は「ともすれば箒のしなふ草花 玄峯(翠兄)、荒増迺今日裳過行巨燧可南 翠兄(印「筑波庵」「玄峯」)」の句で締めくくる。

※翠兄の編著調査においては、立教大学名誉教授加藤定彦氏に資料貸与のご協力を賜りました。